



183号

2013/5/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli-san.com/>

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

◆「わんりい」HPのアドレスが上記になりました。



「ゲレ神山の北麓、安九であった無邪気な子」(2009年5月下旬・四川省甘孜チベット族自治州理塘県・標高4400E)
道路から遠く離れているところ、現代社会からも遠く離れているところ、外部の世界では何が起きているかも知らないところ。
じつじつと、この無邪気な子の天真爛漫な笑顔を記録させてもらった。

(撮影者 烏里烏沙 ウリウサ チベットカム山岳研究会 NPO法人 チベット高原初等教育・建設基金会 ゲーサンメド・理事長)

今年の冬の北京は、大気汚染が酷くて、北京で生まれ育った人々でも「初めてだ」と言うほどでしたが、その原因の殆どは、自動車の排気ガスだと思われています。北京では地域暖房が発達していて、昔は暖房用スチームを作るために石炭を燃やしていたので、冬だけは空気が汚れていました。しかし7、8年まえから、石炭ボイラーの規制が厳しくなり、施設の改善が義務付けられてかなり良くなりました。

オリンピック開催を目指して、北京市内の大規模工場も移転させて、大気汚染の抑制をはかり、その面ではかなり成果を挙げましたが、皮肉なことに、その間に激増した自動車の排気ガスがそれまでの成果を無かったことにしてしまいました。自動車の増加が急激だったことに加えて、ガソリンの質が余りよくないので、車の排気ガスで大気汚染は却って激しくなりました。もともと北京は、気候の関係で、冬の間冷たい空気が上空で蓋になる逆転層が出来て、汚れた空気が逃げにくいのだそうですが、今では、季節を問わず程度の差こそあれ、大気汚染が付いて回ります。

中国では、資源の節約と大気汚染抑制の面から、電気自動車の普及を図っていて、今までも、各地の地方自治体が公共交通の電気自動車化を計画し、メーカーと売買契約を結んだと言うニュースが報道されていました。北京でも、契約していた電動車輛が完成して、市内の2路線で運行が始まり、これから順次電動バスに変更して行くそうです。バスが全車電動車になるだけでも、排気ガスは勿論のこと、街の交通騒音もかなり緩和されるのではないかと期待されています。

中国の自動車保有台数は増加する一方で、2020年にはアメリカ・ヨーロッパを抜いて、世界一になるだろうと予想されています。確かに中国の人口は世界一ですが、そればかりでなく、富裕層が一家で2台、3台と車を持ち、一人一台の感覚で乗り回していますから、自動車の増加の勢いは暫く衰えないでしょう。新しく車を買う人々には、是非電気自動車を購入して欲しいものです。

しかし、金持ちではない一般市民の足は、タクシー・バス・地下鉄です。北京のタクシーの初乗り料金は10元のままですが、昔と比べてメーターの上がる距離が短くなり、随分高くなりました。それ

でも日本と比べると格段に安く、気軽に利用出来ます。しかし交通渋滞が激しい現在、タクシーより地下鉄のほうが便利です。

随分長い間、北京の地下鉄は、長安街の下を建国門の東の四惠東から、西の郊外の苹果園まで東西に走る1号線と、環状2号道路の下を循環して走る2号線しかありませんでした。1号線は、建国門・王府井・天安門(東・西)・西単と、中心部の観光には便利でした。2号線は、前門を通り、建国門と復興門で1号線と交差しています。料金は3円で、乗り換えると5元でした。バスは当時から1元ですから、地下鉄はかなり高く感じました。

それが、6、7年前に日本のスイカやパスモと同じようなプリペイドカードが導入された時に、何と、2元に値下げされ、乗り換えは無料になりました。この時、バスも現金で乗ると1元のままですが、カードを使えば0.8元になりましたが、地下鉄の割安感は格別です。

しかも、その後地下鉄はどんどん増えて、今では16の路線が運行しています。北京市の郊外まで延びている6路線(空港線・八通線・昌平線・大興線・亦庄線・房山線)を除いて、市内で運行している10路線は、全線何回乗り換えても2元です。建設中の6路線も2017年には全部開通するので、随分便利になります。

地下鉄は地下に潜ってしまうので、景色が見られないからつまらないとおっしゃる方には、13号線に乗って見ることをお勧めします。13号線は、北京動物園近くの西直門駅から、北のほうへ上地・回龍観など大きなオフィス街や住宅団地のある地域を通して、雍和宮近くの東直門へ帰ってくる、軽量軌道鉄道(中国では“轻轨 (qinggui)”)と言い、地下鉄と同じ扱い)ですが、地下鉄と繋がっているのに、丁度モノレールのように少し高い所を走るので、周りの景色がよく見えます。1時間余りかかりますが、なかなか楽しい経験です。何と言っても2元で、接続する地下鉄への乗換えも自由ですから。

私もこれからは、古い北京情緒が無くなることばかりを嘆いていないで、最新の地下鉄を大いに利用して、新しくなった北京を巡り、違った魅力を見つきたいと思います。

私の調べた諺・慣用句 19
窮鼠猫を噛む

三澤
統

「窮鼠猫を噛む」という慣用句があります。弱いものが追いつめられて、にっちもさっちもいなくなつた時に、全身の力と気力をふりしぼって無謀とも思われる自分よりはるかに強い相手に、必死ではむかうことを言います。異常な力を出して反撃した結果、相手も思いもよらぬ打撃を受けるかも知れません。

ところで、中国にも「窮鼠猫を噛む」と同じ意味合いをもつ故事があります。今回はその故

事を調べて見ました。

辞書では次のように載っています。

▲三省堂 現代国語辞典：

「窮鼠猫を噛む 弱い者も、追いつめられれば、必死になって反撃して、強い者を負かすことがある、ということのたとえ」

▲小学館 中日辞典：

窮鼠猫を噛む 同じ意味合いをもつ中国の成語に“困兽犹斗”があります。

「困兽犹斗 kùn shòu yóu dòu 追いつめられた獣はなお闘う。窮地に陥った悪人がかえって頑強に抵抗すること。窮鼠猫を噛む」

この成語の出自は〈左伝(注)・宣公十二年〉の

「困兽犹斗，况国相乎？(窮した獣はなおも闘う。況や一国の宰相に於いてをや?)」の部分です。



中国の春秋時代、晋軍は鄭国を救うために出兵したときの戦いで楚国に敗れました。晋の景公は、この知らせを聞き、かんかんに怒り、負けた責任の追及を要求しました。晋軍の全軍の将である荀林父は、この度の敗北の責任は自分にあると痛感し、処刑して欲しいと景公に願い出ました。この時大夫(官職名)の士貞子が止めに入り、ゆっくりと落ち着いた態度で景公に言いました。

「三十年以上前、先君の文公が楚との戦である“城濮の戦”で、大勝した折のことですが、晋国は国を挙げて勝利を祝いました。ところが文公が少しも喜んでいないのを見て、周囲の者がどうしてだろうと訝しく思い、文公に“強敵を打ち負かしたのに、なぜお喜びにならないのですか？”と尋ねました。すると文公はそれに答えて次のように言いました。

“今回の勝利は我々が緻密な戦略を講じて、楚軍の左翼・右翼を両方とも一度に撃破できたので楚軍の大將の子玉は、完全に身動きできなくなってしまい窮地に陥つたのだ。そのためどうしても劣勢を挽回できず、その場は止むを得ず戦闘を止めるしかなかったのだ。その時、子玉はどんなにか悔しかったであろう。楚軍敗れたりといえども、まだ子玉は生きているのだから、何で我々は気を緩めることができようか。追いつめられて窮地に陥つた野獣は、尚も猛烈に反抗するという。まして一国の宰相であれば尚更であろう。彼は追いつめられた無念を晴らすべく、何が何でも晋を撃破してやろうと必ず敵討ちにやってくるはずだ”

実際は、後に子玉は敗戦の責任を問われて自殺してしまうのですが、文公は子玉の死を知ると“これでやっと私を害するものはなくなった”と言って大いに喜んだということです。楚国が先君の文公に敗れたのを第一の失敗というなら、楚王が子玉を自殺に追いやってしまったのは第二の失敗と言えるでしょう。それでも陛下は(優秀なリーダーの)荀林父を処刑なさいますか？」

景公は士貞子の話を聞いて、はっと悟りその場で荀林父を赦免したのです。

〈注記〉

春秋左氏伝：「春秋」の注釈書。三〇巻。春秋三伝の一。左丘明の作と伝えられる。戦国時代の成立といわれるが、前漢末の偽作とする説もある。春秋三伝のうち最も文学性に富み史実も豊富である。左氏伝。左伝。左氏春秋。(大辞林より)

ところで、張委はお酒を飲みながら庭の景色眺めているうちに、ますますこの庭が気に入ってきました。

「おい、ちょっと相談したいことがある」

「どんなことでしょうか？」

「この庭を売ってくれないか？」

秋先がびっくりしました。

「え！何を言われますのじゃ。この庭はわたしの命です。売るなどとんでもないことです！」

「おい、わたしの命だなどというな。金はいくらでも出す。仕事がなくなると心配するなら、今まで通りここに住んで俺のために花を育てるっていうのはどうだ。こんないい話はどこにもないだろう？」

張委の仲間たちも張委に口を合わせて

「おい、お前、運がいいじゃねえか？ 金は懐に入るし、良い仕事にはありつくし、早く張委さまに礼を言えよ」

あまりにも突如な話で、秋先は頭が真っ白になってしまい、何と答えてよいか分かりません。ただただ、自分が大切に育てて来た大好きな庭が奪われるかもしれない恐怖にからだの震えが止まりません。

「だめです！ いけません！ 庭を売るなどということとは金輪際できません！」

張委は、これまでどんなことでも反対されたことなどありませんでした。それが思っても見ないことに秋先に自分の申し出を強く拒否されて、大変怒りました。

「何だと？ 嫌だっていうのか？ 馬鹿な奴だな！ 俺のいう通りにしないなら、後が大変なことになるぞ！ 分かるかい？」

秋先はいったいどういうことになるか分からず恐怖で黙っていました。

「おい、早く答えろよ！ 売ってくれるかい？」

「わ、わしはもう言ったのじゃ。売れないのだ」

「なに？ まだ売らないと言い張るのかい？ 頑固なじじめ。この庭を俺に売らないっていうなら花畑はめっちゃめっちゃにしてやるぞ！ 信じるか信じないか、じじい次第だ！」

秋先は張委という、このならず者の悪名を以前に聞いた事がありました。今日こそは本当にその無茶さ、乱暴さが分かりました。秋先は大変腹を立て、言いたいことは山ほどありましたが、よく考えて、このまま言い争うより、むしろまずは結論を先送りする戦術を取った方が良いと思いました。

「じゃ、わしによく考えさせてくれるかね？ 一日でもいいから」

「よし、言う通りにしよう。いくら欲しいのか明日までよく考えておくんだな。じゃあ、今日のところは帰るとしよう」

張委は承知しました。

張委の一行はお酒を既に沢山飲んで、みんなすっかり酔っていました。彼等は帰ろうと立ち上がりましたが、足がふらついてちゃんと歩けず、よろよろとよろめいては秋先が丹精して育てた植物にぶつかってばかりでした。秋先は慌てて両手を伸ばし、張委達から花を庇おうとしました。張委はそんな秋先を見て、

「大丈夫、大丈夫、こんなに沢山の花が咲いているのだから、一輪や二輪ぐらいは気にしなさんな。みんな、もっと沢山取って帰って今晚よく観賞しようよ」

と両手を伸ばして乱暴に花を手折り始めました。

秋先は張委を捉まえると大声で

「止めて！ 止めてください、ぼっちゃん。こんなに奇麗に咲いている花を切っちゃうなんて可哀想じゃないですか！ 花も生きているのだから、花の命を奪うことになる。ぼっちゃんのしていることは犯罪です」

花を庇う秋先に対して張委は怒り始めました。

「なにい!? 犯罪だとお!? 明日からこの庭は俺の物になるんじゃないのか？ だから、俺がこの庭で何をしようとか誰も何も言えない筈だ。この庭の花を全部切っちゃっても、犯罪などになる訳がない！」

と、張委は更に花を自分に近づけ、手で花をむしり始めました。秋先は、そんな張委を見て我慢も限界に達し、張委を強く押し戻して花を守りながら怒鳴りつけました。

「やめなさい！ わしの目が黒い間は、花一つだって
ちぎることは許さん！ 花から離れなさい！」

張委には今まで面と向かって自分にはむかう人に
出会ったことがありませんでしたので、秋先の強い
怒りの言葉に暫しあっけにとられ、しかし、またすぐ
我を取り戻し、指で秋先を指すと、大きな声で

「これはこれは、このクソ爺！ ずぶとくも俺に指図
をするのか？ この庭のすべてはもうすぐ俺のもの
だ。みんな！ 怖がるな！ 花を思う存分むしりとして、
この花畑をめちゃめちゃにしてやろうぜ！」

と仲間たちに呼びかけました。張委の一行は我さ
きに花畑に突入すると、秋先が丹精込めて育てた植
物や花を踏んだり、むしったりの乱暴の限りを盡しま
した。

可哀想に秋先は、彼らの後についてあちこち走り回

り乱暴をさせないようにしようと思いましたが、多勢に
たった一人ではどうしようもありません。結局、何もで
きないままあつという間に秋先の目の前で大好きな花
畑は乱暴者達によって無惨な有様になりました。秋先
は地面に座り込んで「わあわあ」と泣き始めました。

秋先の庭での大騒動に、人々がどんどん集まって
来ました。殆どの人は秋先を同情して張委一行の行
為に眉を顰めました。張家の勢力を怖れて非難の
気持ちをじっと堪え秋先の代わりに張委に謝ったり
なだめたりしました。

張委は、庭先に大勢の人が集まって来たので乱暴
を止めました。

「今日はここまでだ。明日また来るからよく考えて
おけ！」

張委は秋先に強く言い残して帰りました。 (続く)

智子の雑記帳 92

日本再発見 外国人と一緒に散歩した

4月の晴れた日曜日、観光でいらした外国人の
散策にお供した。当然、通訳兼ガイドの方は別に
いて、私は写真係。ちょっと大げさなカメラを持
たされて、金魚の糞よろしく、後を付いていく。

外国人とは、オーストラリアからいらした御仁
お二人だ。せっかくなので、英語がまったく話せ
ない私も、海外旅行で磨かれた、ボディランゲ
ージで会話する。これが、なかなか通じるので面白
い。お二人とも、私の挙動不審な動きに、ひとつ
ひとつ付き合ってくれて、帰り際には、コアラの
キーホルダーをくださった。

外国の方と一緒に、3時間の散歩はかなり楽
しかった。何より、彼らが何気ないことに、ひとつ
ひとつ驚いて、興味を示されるので、いつもの
街が、急に個性豊かに光ってくる。

まず、駅から歩いてすぐに、パチンコ店に惹か
れる。オーストラリアにパチンコ店はないらしい。
入ってみたい！ と、ぞろぞろと全員で入って
いくと、すぐに出てきて “Noisy!” とおっしゃる。

そりゃ、そうでしょう。そして、すぐに自動販売
機に反応。「これは、温かい飲み物が出るの？」
と楽しげに聞く。

「買って見たらどうですか？」と私もボディラン
ゲージで、お勧めする。お金を入れて、缶コー
ヒーを買う。出てきた缶を右手左手交互に持ち
ながら、” Hot! Hot!” と、益々楽しげ。

私も海外に出ると、他愛ないことが楽しいの
で、気持ちがとてもよく分かる。自動販売機の前
で、缶コーヒーを片手に、満面の笑みの写真を一
枚撮影。缶コーヒーを片手に、散歩を続ける。

「すごいねー。道がこんなに細いよー」と、彼
らはまた感動。電線を指さして、またまた感動。
鯉のぼりを発見して、さらに感動。オーストラリ
アには、大きな道しかないらしい。そして、電線
もない。当然、鯉のぼりもない。ひとつひとつが、
珍しくてキラキラしている。一緒に、日本という
「外国」を旅した気になった。

(真中智子)

三人目は王羲之(303年～361年)である。東晋時代(317年～420年)の政治家であり書家である。彼は山東省の人であるが、紹興の人と思われるほど紹興に縁のある人である。48歳(351年)の時、会稽郡(現在の紹興市周辺)の長官として赴任してきたから、ここでの生活は亡くなるまでの10年間しかない。であるのに、なぜ紹興と深いつながりができたのかを見てみよう。

彼は山東省の臨沂の名門の出であるが、人格識見とも優れ朝廷の高官から高く評価されていた。しかしながら中央(首都は健康、つまり南京)から要職に任命されてもその都度就任を固辞、断れなくなった彼は地方勤務を求めた。そうして赴任したのが会稽郡であったのである。彼はこの地がとても気に入る、長官は4年間で辞し、以後隠遁生活を送る。どの国でも俺が俺がという人物が多い中で、彼のような人物が中央政界に入っていれば東晋の時代ももう少し長続きしたかもしれないと思いたくなる。

紹興市は、蘇州、杭州と並んで江南を代表するエリアである。長江の南——江蘇省の南部と浙江省一帯は古来より“江南”と呼ばれ、風光明媚で温暖な気候と肥沃な大地で有名である。そして中国の食糧供給基地の役割を果たしてきた。「江浙(江蘇省と浙江省)実れば天下足る」と言われていることで

もわかる。江南地方は、河川や網の目のように張り巡らされた運河が走り、そこには石の橋がかかり、水面に映る灰白色の家壁は今でも古き良き時代の中国を彷彿とさせる。この様なところであるから王羲之がこ

の地を愛したのは至極当然のことであろう。そしてこの地を終焉の地と決めている。

私が紹興市を初めて訪れたのは、2008年の10月である。杭州市へは紹興市に行った翌日なので、この時は秋瑾(4月号をご参照下さい)のことは知らない。

逆の日程なら秋瑾のゆかりの場所も見たいかもしれないと思うと少し残念である。紹興市に行ったらどうしても見たいと思った所は、「蘭亭」と「魯迅の故居」である。私が懇意にしている旅行社のZ社長は、先ず市内中心部から南西に約13kmのところにある蘭亭に案内してくれた。

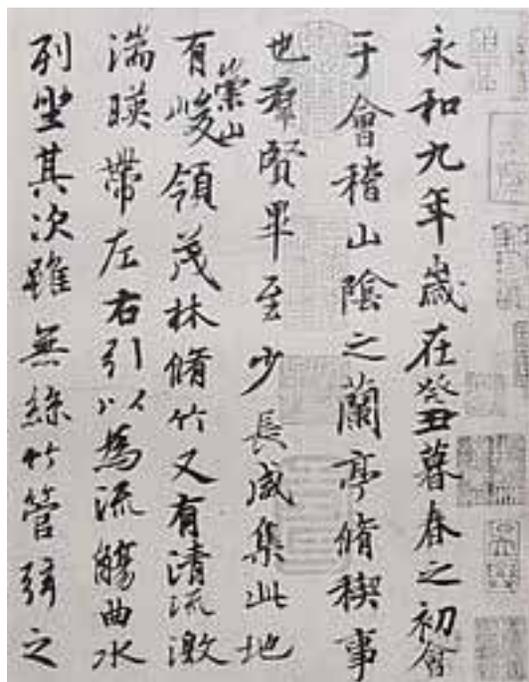
蘭亭とは地名であるが、この名の由来は春秋時代の末期、越王勾践がこの地に蘭を植えたところからきているという。素敵な名である。車から降りて竹藪などの植え

込みの道をZ社長の後に続きながら歩く。ようやくあの蘭亭に来たのだと感慨を新たにす。しばらく歩くと高さ約2メートルの石碑があり、その奥には池が広がっていた。その碑には半畳くらいの大きさで二文字、「鷺池」と刻まれていた。ガチョウの池だからガチョウが泳いでいるのだろう、と簡単に考えていたが後日帰国して調べると次のことが分かった。王羲之は幼いころからガチョウが大好きでこの池にガチョウを飼っていたため、鷺池と言われるようになったというのだ。

そして石碑の“鷺”の文字は王羲之が、“池”の文字は息子の王献之が書いたものだという。確かに二文字のそれぞれの太さは違い、同一人物が書いたようには見えない。王献之も有名な書家で、羲之と献之を「二王」



王羲之肖像画



王羲之「蘭亭序」(神龍半印本、部分)書

として敬われている。王羲之の紙に書かれた書の真筆は、幾多の戦乱などで何一つ残っていないとのことであるが、この石碑の文字は石に刻まれているとはいえ、真筆とは言えないのであろうかと思ったりした。

さらに進むと、有名な曲水が見えてきた。「曲水流觴」の宴が開かれていたところだ。「觴」とは「さかずき」のことだ。近くの川から水を引き込み、曲がりくねった流れをつくって上流から盃を流し、それが自分のところに来るまでに詩を詠むというご承知の遊びであるが、曲水を見たとき、意外に小さいなという印象を受けた。ネットでは、1980年の改修時に清代に元々あった場所に再建した、とあったが果たして当時の図面のようなものに基づき、きちんとした時代考証のうえ造られたのかとすこし疑問を感じた。

今年の初め、上野の国立博物館で王羲之展が開かれていたので見に行った。ちょうど一年前にあった「北京故宮博物院200選」ほどではなかったが、大勢のひとが詰めかけていた。日本人の中国の歴史・文化に対する関心の高さが今回も伺えた。

163点の展示があったが、やはり「蘭亭序」のコーナーは黒山の人だかりであった。そのコーナーにはさまざまな蘭亭序が展示してあった。多くの書家が王羲之の書いた蘭亭序をお手本にしたものが残っているわけだ。それらから真筆を想定するしかないのである。そこの壁には有名な353年、陰暦3月3日の曲水の宴の様子が長尺の白と黒で描かれた絵巻物となって掲げてあった。それを見て当時の曲水流觴のイメージがかなりはっきりと理解できた。この宴の時、王羲之は41名の地元の名士を招待し、小川の両側に座らせた。説明書きを読むと、招待者のうち王献之を含む16名が盃が流れてくるまでに詩を作り上げられなかったとある。ゆったりとした流れにしても短い時間であろうから仕方なからうと思うが、できなかったものには罰として大きさは定かではないが3杯の酒をしっかりと飲まされたという。

この曲水の宴はご承知のように日本に伝わり、平安時代の貴族が和歌を詠んだりしたのである。さらに付言すれば王羲之の書は平安時代に三筆(空海、嵯峨天皇、橘逸勢)や三蹟(小野道風、藤原佐理、藤原行成)を生むなど、和様書道に多大な影響を与えている。

さて出来上がった詩をまとめた詩集の序文を書いたのが、世に名高い「蘭亭序」である。全文324文字

の序は、王羲之の行書作で書の歴史上最高傑作として今日に至ってもなおその地位は微動だにしない。ただ古今一の評価を受けたのは、彼が亡くなってから300年以上経ってからのことである。実は書の名手でもあった唐の第二代皇帝・太宗(599年～649年)が王羲之の書を絶賛し愛好したのである。そして王羲之のありとあらゆる書を集めたという。最高作品の「蘭亭序」は、王羲之から数えて7世の孫の智永からだますようにして入手した。それを太宗は自分の死に際し、自分の墓である昭陵に収めさせた。なお一説によると戦乱の際、盗掘され蘭亭序の所在は行方不明とも言われているので、ひょっとするとどこかで眠っているかもしれない。

ここで「蘭亭序」がどのような文章か前半部分を紹介したい。

最初は、〈永和九年歳在癸丑。暮春之初。會于會稽山陰之蘭亭。脩禊事也。～～〉で始まる。翻訳は、「永和九年(353年)癸丑の歳、三月初め、會稽山の蘭亭に集ったのは禊を行うためである」である。それから、「立派な人たちはすべて至り、老いも若きも皆集まった。さてこの地には、高い山険しい嶺、生い茂った林と長い竹とがあり、その上に綺麗な流れ(溪川)と早瀬とは、あたりに照り映えている。その水を引いて觴を流すための「曲水」を造り、一同周りに座った。管弦の華やかさこそないとはいえ、一杯の酒に一首の詩はまた秘められた感情をのびやかに表すのに十分である。この日空は晴れ渡り、大気は澄み、春風がのびやかに流れている。広大な宇宙を仰ぎ見、万物の生命の素晴らしさを思いやった。そもそも人は互いにこの世の中で暮らしてゆくにもある者は胸の想いを取り出して、一室の中で語り合い、ある者は好むところに従って、肉体の外に自由にふるまう。～～」、以下人生観や心のうちが連綿と続く。日本語の訳文を見るとそれなりに理解はできるが、王羲之の心情がどの程度正確に訳されているのであろうか。

蘭亭には、もうひとつ大事なスポットがある。それは「御碑亭」という。高さ12.5メートルの八角形の建物で柱だけで支えられ壁はない。屋根はこうもり傘を逆さにしたような二層の構造で、とても強い印象を受ける。傘の骨の先端に当たるところは、尾がピンと立った鳥を思わせる。

建てたのは清朝第4代の康熙帝(1654年～1722

年)である。この中に巨大な石碑が立っている。碑の前面は「蘭亭序」が刻まれている。実は康熙帝が1693年に蘭亭に行幸の折、この場所のあまりの美しさに感激し、その場で蘭亭序全文を書かれたという。それを碑に彫ったのだ。康熙帝も王羲之をこよなく愛した一人であったらしい。碑の裏面は孫にあたる第6代の乾隆帝(1711年～1799年)の詩が刻まれている。どちらも達筆であるが、満族が自分たちの文字を持ちながら、漢民族の文化を称揚するさまは何と表現すればいいのであろうか。

この碑の蘭亭序を声を出して読んでいる中国人も結構いるそうであるが、彼らはどのような点が素晴らしいと思いつつ読んでいるのだろうか。彼らの視線にどう響くのだろうかと考えつつ、ここを後にして出口の方に向かった。そこには何軒かの土産物店があったので、中に入ってのぞいてみた。すると高さ9センチ、直径6.5センチの黒い石の鉛筆立てが目にとまった。その円筒形の側面に蘭亭序324文字が彫りこんである。持つとずっしりと質感があり、さっそく買い求めた。この鉛筆立ては私の机の真ん中に置か



御碑亭

れ、存在を誇示している。

最後に書聖といわれる王羲之の書風を紹介して、この稿を終わりとしたい。康有為の書の書風も全く理解できなかったが、王羲之もやはりよくわからない。

〈ひととき威勢がよく、龍が天門を跳ねるがごとく、虎が鳳闕^注に臥するが如し〉 (つづく)

注) 鳳闕とは漢代の宮城の門の名。門の上に銅製の鳳凰が飾り付けてあったのでいう。

中国の笑い話 VIII (「365夜笑話」より)

第21話：西向きの部屋

先生：「夏休みに、君は何時(什么时候)に起きるんだね？」

生徒：「僕の部屋の窓に太陽が差しこんだら、すぐ起きます」

先生：「それじゃ、随分早いね。早過ぎないかい？」

生徒：「いえ、僕の部屋は西向きですから」

第22話：瓜は皆食べられる

一家でスイカを食べていた時、息子が父親に聞いた。

息子：「パパ、瓜類はどれでも食べられるの？」

父親：「そうだよ。どれでも食べられるよ」

息子：「じゃあ、傻瓜(shǎguā=間抜け)も食べられるの？」

第23話：お腹が破裂する

男の子が、ビスケットをいっぱい食べて、もっと食べようとしていた。

父親：「もう止めておきなさい。そんなに食べたら、お前のお腹は破裂しちゃうよ」

男の子：「僕はもっと食べるから、パパは避けてね」

第24話：足を洗って、お菓子を食べる

小珍が初めて幼稚園に行った日、幼稚園から帰ってきた小珍に、心配していた母親が幼稚園の様子を尋ねた。

女の子は、答えて言った。

「幼稚園って変なのよ。お菓子を食べる時、足を洗う歌を歌わなくちゃいけないの。おかしいでしょ」

母親がどんな歌か聞くと、小珍は歌った。

「洗洗脚(xǐ xǐ jiǎo), 慢慢淹(mànmàn yān) (足を洗いましょ、ゆっくり水に浸かりましょ)」

それを聞いて、母親は全てを理解した。

歌は、本当は「细细嚼(xìxì jiáo), 慢慢咽(mànmàn yān) (よくよく噛んで、ゆっくり呑み込みましょ)」というのだった。

(翻訳：有為楠君代)

4月初旬、四姑娘山の麓標高3200mの日隆では未だ時々雪が降っていますが、下流の標高2000m前後の丹巴では暖かくなり梨の花も終わって林檎の花が咲き誇っています。

農業暦の清明はこの頃で(今年は4月5日)、丹巴では畑に水を入れトウモロコシの種を蒔き伸びて来た雑草を鋤で削り取る時期です。清明は「万物が清々しく明るく美しく春を迎えて郊外を散策する日」だそうですが、私と息子も家内に連れられて山の上の緩斜面に在る家内の実家へ行ってきました。家内の実家はギャロンの伝統的な農家で農作業に忙しく、家内と小学生の息子は少しばかり農作業を手伝いましたが、私は撮影班で農作業は遠慮させて貰いました(^_^;)。

この日は清明の言葉通り良く晴れて新緑や花が大変鮮やかでした。この時期に咲く野の花は限られますが、スミレ、ウメ、タンポポ、春リンドウ、ハシドイ、エンゴサクが見られました。それらの花を蝶や蜂が飛び交って蜜を集めていましたがその中にベニシジミ蝶の仲間(リーベニシジミ *Lycaenali*)も居ました。

右写真の木の花は、最初サクラと思いましたが、ウメの花でした。この雑木は畦道に自生していて細長い新緑がほとんどでしたので、最初は柳かと思ひ白い物は何だろうと眺めたところ花でしたので、少々驚いてそのときはサクラだと思ひ込んでしまいましたが、あとでウメと判りました。ウメの4枚花はさほど珍しくないようです。

また胡桃も新芽が伸びて開花していました。右下の写真(左)は新芽全体

で下の方に大きな雄花の房が見え、先端に小さな白い雌花が僅かに見えます。下の写真(右)はこの雌花で、小さな実も見えています。当地の胡桃はペルシアグルミ "*Juglans regia*" の仲間です。胡桃は栄養価が高い(100g中におよそ蛋白質15g、脂質70g)ため当地では古くから大切にされている食べ物です。

大川さんのホームページはこちら

- 四姑娘山
<http://rgyalmorong.info/scholaweb/conts.htm>
- 女王谷
<http://rgyalmorong.info>



春の野に咲くスミレの一種



ウメの花。4枚花はさほど珍しくない



蜜を吸いに来た蜂



ベニシジミ蝶の仲間



胡桃開花時の新芽全体



胡桃の雌花の拡大

「鄧さん頑張る・日本探検記」は、2004年から2006年の2年間、青森県六戸町の国際交流員として国際友好活動にかかわった、中国山西省太原市に住む一中国人・鄧仁有さんの日本体験です。

青森県六戸町にきてから、もう二ヶ月経ち、色々な交流と体験をしました。

去る6月8日、今年度の第一回中国講座一日目が順調に終わりましたが、事前の資料調べ、テキストの作成など結構忙しかったです。特に当日の朝、講座用の看板を作りました。大きい筆で太文字を書いた経験がないので、字の手本を参考にしながら、まず、古新聞で繰り返し繰り返し練習しました。やっと出来たのは自分の意に適應していないけれども、初めてだから仕方がない、と自ら慰めました。開校式の直前、わくわくしている時デーリー東北新聞社の記者が取材に来たので、今回の交流事項について話した後、講座教室の二階に上がりました。そこで東奥日報の記者に取材され、何だか私が急に重要人物になったような気がしました。開校式では田中教育長のご挨拶があり、講座では私が中国の地理、民族構成などについて紹介し、中国語の挨拶言葉を教えました。

講座が終わってから、皆によかったと言われました。でも皆さん、本当にですか？翌日の朝、事務室に入ると「新聞に出ていましたよ」と言われ、私の机の上に新聞のコピーが一枚置いてあり、見たら「中国講座」という見出しの記事が載っていました。嬉しかったです。

5月19日には消防訓練を行われました。その前の日に、仕事が終わって、消防訓練の練習をしました。それは文化ホールの機械室より出火、という火災の想定で繰り返し行いましたが、当日10時ごろに正真正銘の消防関係者二名が来られ、訓練を開始したら、昨日の想定と違って、「ステージ

他」の火災報知器が鳴りました。私は慌てて自火報電話機を持って、ステージの方にダッシュし、あちこち見ましたが、出火場所を見つけられませんでした。えー？これはまるで鬼ごっこですよ。また、喘ぎながら韋駄天足で裏とかも探したら、隅にある小さい部屋で消防関係者を見つけ、手に持っている電話機で「火事です、ステージより、火事です」と事務室に確認の報告をしました。

本当は、ステージではなく、楽屋でした。何も考えずに近くの消火器を掴み、消火の振りをして、消火器を放り投げて二階に上がり、確認をしてから自衛消防隊長に「逃げ遅れたものはいません」と報告しました。訓練が終わり、自己反省しました。もう一歩早く、出火場所を見つけたら、報告ももう少しと具体的なだったら、でもこれは後の祭りでした。

以前、中国で消防知識の教育を受けたことがあります。消防隊の消防訓練の見学もしたことがあります。でも自分自身が消火訓練をしたのは今回が初めてです。本当に万が一のことを考えると、自分のためにも、他人のためにも、とても有益なことだと思います。

このような仕事上のチャレンジもあれば、生活上の体験もありました。

5月のある日のことでした。社会教育課の皆さんの紹介で、私は文化ホールにある書道教



鄧さんの中国講座風景

室に入って見学と体験をしました。17日にまた、再び皆さんと共に書道教室で本気で練習しました。授業を終えて先生と別れる時、先生に「鄧さん、うどん食べたことありますか?」と聞かれ、私はうどんと聞き取って、即座に「はい、よく食べますよ」と答えました。そうすると先生が車から、新聞紙に包まれた今まで見たことのない中国の芹菜(セロリー)に似た物を出しました。えー?これがうどんですか? 私は聞き返しましたら、先生は今度「うどん」とゆっくりとした口調で答え「和えてもいいし、炒めてもいいですよ。」と丁寧に教えてくださいました。いただいてからそのまま自宅に持って帰り、さっそく料理しました。ちょうどお腹がぺこぺこで試食したら、なんとも言えない味がして、「好吃! 好吃!」(美味しい、美味しい)と自ら言いました。

一体これは何だろうと不思議に思いながら、辞書で調べたら、中国では漢方薬の一種でした。そうすると、これを食べると体によいかもかもしれません。

これからも更に交流を深め、多くの体験をしたしたいと思います。鄧仁有の中国講座にも是非、ご参加をお願いします。(原文のまま)

‘わんりい’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしく願います。尚、新年度の会費の納入は、なるべく早くお願いできれば有難いです。また、新入会を歓迎します。

年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。入会されると

①年10回おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をpdfファイルでお送りします。こちらは無料です。

四川省でまた大きな地震が発生しました 犠牲となられた方々へ 深く哀悼の意を表します

‘わんりい’5月号を編集している最中に、四川省で大きな地震がまた発生したというニュースが飛び込んできました。2008年の四川大地震からまだ5年そこそこしかたっていない。ニュースは、今回の地震による死者は192人(22日現在)、行方不明者は23人で、負傷者は1万人を大きく超えたことを伝え、山間部での災害で救出作業は難航している様子が映し出されています。

2008年の四川大地震被災地は、その何年か前から四姑娘山・登山基地周辺で活躍されていたらっしゃる写真家の大川健三氏の案内で、旅好き山好きの‘わんりい’メンバー達が訪れ、見知った人たちも住んでいる地域で、その惨状に‘わんりい’としてできることは何かを考え、在日で活躍の中国民族音楽演奏者の、姜小青さん、銭騰浩さん、馬平さんらに協力しチャリティの演奏会を開催しました。しかし、その翌々年の2010年3月には東日本大震災が発生し他人事ではなくなりました。そして再び四川の地震で、この間世界各地で大地震が頻発しています。

何年か前までは、地震大国の日本に住みながら、地震とは無縁の感じで生きてきました。前号で、真中智子さんが「震災から2年 あの日から変わったこと」というタイトルで‘わんりい’に寄稿下さいましたが、本当に自分たちの生活が、地震その他の自然災害と関わらないで居られた時代は終わったのかもしれない。

この度の地震で犠牲となられた人々へ深く哀悼の意を表すると共に、また、私たち自身も自然災害に心して備えたいものです。(田井光枝)

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。

又‘わんりい’の活動についてのご希望やご意見及び‘わんりい’に掲載の記事などについても、簡単なご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

台湾登山ツアー体験② 虎爺温泉会館

佐々木 健之

◆今夜の宿「虎爺温泉会館」へ

私は日本人だけの登山ツアーと思っていたが、集まったのはどうも台湾の人達ようだ。そして、私から見るとかなり若い人ばかり。これは困った、台湾人だけとは想定外だったので、言葉の問題もあり、不安だ。まあ、いずれ日本人も少しは来るであろうと期待した。

あとで案内を再読すると「台湾現地のお客様との混載ツアーとなります」と書いてあるので、勝手に思い込んだ私が悪い。さらに補足すると、受付窓口のネットは台湾の日系旅行会社で、主催は台湾の登山会社「Y社」である。

Y社は傘下に登山用品店もあり、登山関係の事業を手広く運営している。

とうとう日本人らしい、60年配のおじさん登山者が現れた。早速近づいて挨拶すると、彼はFさんといい、広島県の人であった。Fさんは以前にも今回と同じY社の「玉山」と「雪山」のツアーに参加したことがあり、このようなツアーの内情をよく知っていた。

Fさんによれば、雪山へ行ったときは台湾人の年齢が若いので歩くのが速かった。ために、日本から来た70歳代の人については行かれずに落伍したという。玉山の時は大雨で登頂を断念し、途中の山小屋から引き返したそうだ。このときはかなり濡れて寒かったが、台湾の山小屋にはストーブがなく、混雑した山小屋で、往生したそうだ。

Fさんは中国語がよくでき、ガイドからの連絡など通訳してもらい、何かとお世話になった。

やがて緑を基調とした派手な模様の中型バスが、歩道に横付けした。Y社の「遊覧車部門」の専用バスだ。トランクに荷物を積み込み、私とツレアイは前方に座った。

人数のことはあとから写真を見て分かったが、日本人は私たち2人、Fさん、大阪からの60歳代のグルー

プ4人がいて、しめて7人。台湾人が15人、合わせて全員で22人であった。これに主催者側ガイド3人と運転手が付いた。女性はツレアイを入れて4人だった。台湾側は圧倒的に若く、20～30歳代、年長者で40歳代かなと思える人が少しいた。Fさんによる

と、台湾の人は50歳になると登山の対象を低山歩きに変えて、3000m以上の山には登らなくなるそうだ。

バスに乗ると、クリップの付いたプラスチックの名札を貰った。

これには「活動識別證、向陽三叉嘉明湖 健行隊」の文字、そして私の名前が書いてある。名札の下

の方にガイド3人の名前、及びニックネームが書いてあった。ガイドのニックネームを紹介。まずリーダーは「老虎(老練?)」、サブリーダー格が「大柱(頼りになる?)」、女性ガイドは「陽光(明るくみんなのアイドル?)」だそうだ。

集合時刻に遅れる人が少しいたが、ほとんどの人が職場から直行してくるようで、夕食代わりのパンなどを食べながら来る人もいた。Y社側も多少の遅刻は計算済みのようであった。

18時40分、参加人員が揃いやっとバスが出発した。ラッシュ時間帯のため渋滞もあったが、やがて高速道路に入り、それからは順調に進んだ。

バスが出発するとすぐ、ガイドの1人がバス前方に立ち、しゃべり始めた。中国語理解力ゼロゆえ何を言っているのかサッパリ分からないが、登山の概要や高山病について注意事項を伝えているのであろう。彼はいつまでもよくしゃべった。一時間くらいは話し続けたと思う。中国語のわかるYさんも良く判らないそうで、安心した。

途中トイレタイムでガソリンスタンドに止まった。ツレアイはトイレに行ったが直ぐに戻ってきて、床が穢くて、目的の「穴」まで行き着くことができないと



Y社のバス、「池上」のセブンイレブンでトイレタイム



虎爺温泉會館、早朝なので未だ暗い



登山を前に準備運動。後方建物は入山届け提出ゲート。

言った。しかし、女性ガイドや、ほかの台湾女性は何事もなかったかのように用を済ませて(多分)戻ってきた。

ここガソリンスタンドはこまめに掃除をしないらしい。また個人、国によって、汚れの許容度に差があるようだ。

今夜の宿、瑞穂(町名)の「虎爺温泉會館」は台北から南へ、約270kmだ。バスは快調に進んだ。

高速道路のトンネルとしては、世界第五位の「雪山トンネル(12.9km)」も寝ていて気づかず通り抜け、いつしか一般道になり、そして海が迫る断崖の隘路を過ぎると平坦な広い道になった。バスは車が少なくなった夜道を快調に突き進んだ。

いい加減乗りくたびれた頃、幹線道路から脇道に入り「虎爺温泉會館」に着いた。夜目の外観は普通の台湾式旅館である。荷物を持って食堂兼ロビーに入ると、寝るためにすぐに部屋割をした。すでに夜中の24時だ。案内書によると今夜は「団体部屋利用」と書いてあったので、大広間の雑魚寝と思っていたが、実際は4人部屋に分宿だった。男女別に分かれ、ツレアイは女の部屋となり、私は広島のFさん、そして台湾人の大柄な若者2人と相部屋になった。大阪から来た一行は4人なので一部屋で丁度よかった。

◆「虎爺温泉會館」の一夜

あてがわれた部屋に入ると仰天、ダブルベッドが2つ並んでいる。説明書の「団体部屋にて、寝袋をご利用頂いての宿泊となります」の正体はこれだ。台湾の若者2人は別に驚いた様子ではないので、台湾では男と男、女と女のダブルベッド宿泊形態は団体旅行などで普通なのだろう。

成り行き上、私はFさんと添い寝をし、妖しげな一夜を過ごすことになった。寝具は寝袋ではなく、薄い掛け布団だった。

部屋には、シャワーがあり、順番で入ることになった。まずFさんが先に入る。私はそのあいだに室内を調べたところ、シャワーとは別に室外のベランダに相当するところに、小さな浴室があった。浴槽は空だったが試しに蛇口をひねると、温水(温泉水)が出た。一応温泉旅館なので、内風呂といったところか。時間節約のため、私はここのお湯を使い、シャワーの代わりとした。翌日の荷物整理などをして、床についたのは深夜1時過ぎで眠かった。

ダブルベッドは広さがたっぷりあったので、お互いに干渉することもなく寝ることができた。朝、目覚めて若者2人のベッドを見ると、彼らは予備の掛け布団を物入れから出して使い、一人一人でノビノビと寝ていた。これはFさんの指摘でわかった。なるほどこうすれば、無意識に起こりうる掛け布団争奪戦がなく、安眠できるのか…。彼らは同性ダブルベッド睡眠に慣れているようだ。

一方、台湾女性3人と同室になったツレアイは、カタコトの中国語もできないので、どうなったかと少し案じた。だが翌日訊いてみると、単語程度の日本語を話す小娘がいて、心くばりをして貰い、困った場面もなかったようだ。親子ほど歳が違うので敬老待遇というのが真相だろう。

台湾女性ら3人は今回の登山にあたり、登山靴や、登山衣を奮発して新調した人もいた。それら新品を体に着けて、検分に余念がなかったようだ。

日本に帰ってから「虎爺温泉會館」のホームページ



登山道は良く整備しており、危険なところはない



台湾二葉松とその説明板。

台湾の産地によく見られる針葉樹、標高2,800mまで分布。油成分が多くテレピン油の原料になる。

を開くと、私が泊まった部屋は「標準四人房」といい、平日1泊3,600元(1万2千円くらいか)となっていた。部屋代を4人で割れば、1人約3000円だ。Y社がもっと安く契約している可能性はある。

後で分かったが、台湾の民宿では一部屋にダブルベッド2床の部屋がけっこうある。仲良しグループや家族連れなどが一部屋で安く泊まれるように、との配慮のようだ。

明けて11月23日。7時起床、7時30分朝食。内容はバイキング形式で簡単なマントウや、卵、野菜の漬け物などであった。登山隊メンバーは、大陸からの中国人観光客に交じって手早く食べた。

◆いよいよ山へ

8時40分出発、約70kmほど南下して「池上」というところから、西に折れ「南部横貫公路」に入った。「南部横貫公路」とは、台湾の脊梁山脈を横断する数少ない道路の一つだ。大雨などでしばしば通行止めとなる。

いよいよ山の方へ向かう。車窓から見た風景は美田が続く穀倉地帯で、二期作であろうか稲が青かった。

さらに進んで山峡に分け入り、午前11時頃、利稲という集落に着いた。ここは原住民(台湾の少数民族の呼び方)布農族の村である。布農族は日本統治時代最後まで日本に抵抗した部族だそう。

この先、道路が狭くなるため、乗ってきたバスはここでお役ご免となる。一行22人は、四駆車3台に分乗して向陽山登山口へ行く。乗りかえた車は原住民の人達が運転していた。察するに登山者達を輸送することで生計を立てているようだ。利稲から登山口までの四駆車往復代はツアー料金とは別立てで、850元を台北出発時に車中で徴収された。

大雨の跡らしい崩れた路面もあったが、通れるよう

になんとか修復しており、無事登山口まで着いた。クルマから荷物を抱えて降りると、「向陽國家森林遊樂區」という建物があった。入山の人たちをチェックするところらしい。標高は2273m。建物の前で準備をして、12時に出発した。

天気は曇りで、余りぱっとしない。しばらく廃道になった林道を進む。

今日の予定は、向陽山(3603m)という山の中腹にある山小屋、「向陽山屋」まで高度差600m、約2時間半の行程だ。「山屋」とは、山小屋のこと。

大阪から来た、4人は同じ山岳会に所属していた。沢登りや雪山もこなし、いかにも精悍な感じの人たちだった。BSテレビの「グレートサミッツ」で放映したニュージーランドの「アスパイヤリング山」にも登ったそうで強者揃いだ。今回の登山は彼らにとっては軽いハイキングだろう。彼らのうち、Tさんだけが中国語ができ、他の3人への連絡役となっていた。リーダー格のYさんが68歳で、あとの3人は60歳ちょっとである。そうすると、66歳の私が2番目の年長者だ。

参加者の年齢は訊いたのではなく、台湾人参加者全員が持っていた名簿をバスの中で盗み見したので、知った。日本人にはその名簿はくれなかった。

私が現地採用の中国語通詞にしたい広島のFさんは登山歴も豊かで、冬の広島山地をスノーシューで駆け巡っているらしい。四川省で合併事業に携わったこともあるそうで、四川大地震や、排日運動などいろいろ苦労があったようだ。

歩き始めて30分もすると休憩になった。せっかくからだが暖まって調子が出たところだったので、もう少し歩きたかったがまあ、よしとしよう。 (続く)

4月1日から授業がやっと始まった。本来は4月ではなく、もっと早いのだが、昨年は教員・学生双方の数カ月のストのため授業が終わるのが遅くなり、それに伴って今年の新学期も開始がかなり遅れてしまったようだ。しかし、知人に聞いた話では、他の学部の場合、2月から授業が始まったというところもあり、必ずしも大学全体で統一して行うという訳ではなさそうだ。

1月1週目に後期の授業が終わり、その後試験に入った。3月初めまで試験は続いたが、教員は自分の試験科目だけ採点すればよいので、かなり時間的な余裕があった。私の場合は2月・3月は3回か4回程度顔を出すだけで、他の日は自由だったので、キャンディとゴールに出かけてみた。この旅行のことは別の機会に譲るとして、今回はスリランカの正月のことについて書いてみたいと思う。

スリランカでは正月は2回あると言ってもよい。1月1日の万国共通の正月と4月13・14日のシンハラ・タミル正月の2回祝われる。

1月1日は学校も商店も休みではなく、通常通り行われていて、あまり正月という感じはしない。せいぜい商店の飾りやテレビのコマーシャル等でそれらしい雰囲気を感じる程度である。私の勤務先では授業の合間に先生方が持参した手作りのお菓子などをテーブルの上に広げて、皆でそれを食べながら「新年おめでとう」とか「今年もよろしく」等と挨拶を交わし、後は雑談をして30分ほどで解散という具合である。

しかし、4月13・14日のシンハラ・タミル正月は大々的に祝われる。地元のキリバットゴダの商店街では1週間前あたりから正月セールが行われ、大きな買い物袋を手にした買い物客でごったがえしている。友人の話では、郷里に帰るのに土産をたくさん買い込んだという。その上、大きな店では連日スピーカーで音楽や宣伝が流され、それが普段は静かな住宅地まで聞こえてきて、うるさくてしょうがない。日本の年末セール時期と全く同じである。

またシンハラ・タミル正月では、大学は正月の前夜を含めて、4日間休みであるが、私の場合は今学期授業がある日が月、金、土曜日なので、今回の正月休みは8日から19日までの12日間休みとなった。しかし、

8日から10日までは通常の授業は行われていて他の先生方は授業を行っていたので、この間は私にとってはあまり休みという感じはしなかった。

「正月には自宅に来ませんか」という招待を3人の友人たちから受けていたが、2人は比較的近いのでお招きを受けて出かけたが、もう一人はかなり遠いところで、残念ながら行くことは出来なかった。ともあれ、このような機会でなければ、スリランカの正月を体験することは出来ないのも、大いに興味があった。

一人の友人はアーティストといい、キリバットゴダから1時間ほどのところに住む男性で、そこまでバスで出かけた。初めてのところなのでバスで出かけるのに不安であったが、なんとか行くことが出来、友人とも再会できた。彼はロシアとイギリスに留学した経験があり、地元の議会で9年間議員を務め、地元では人望を集めた人物である。3日間彼の家に滞在し、のんびり過ごすことが出来たが、ただ期待していた正月らしき雰囲気は感じられなかった。スリランカ全土で正月のお祝いの様子がテレビでも報道されているのにどうして友人宅では正月を祝わないのか不思議であった。尋ねてみると、彼の家はクリスチャンなので、このシンハラ・タミル正月は祝わないとのことだった。彼が住む地域もほぼ全家族クリスチャンで、彼の村には教会は2つあっても仏教寺院はなかった。

シンハラ・タミル正月の新年の行事は仏教徒とヒンズー教徒のためのもので、イスラム教徒は別な時に祝い、クリスチャンは1月1日を新年として祝うそうで、それぞれ異なり、全く予想外であった。しかしながら、せっかく来たのだから料理だけでも正月らしいものを味わってほしいと奥さんが腕をふるってくれた。写真①がその正月料理である。

日本で正月料理は普通の時でも食べることは可能であるが、スリランカでもそれは同じで、これまでも目にしたことも食べたこともあった。写真の食べ物は、右から「キリバッド」、「オイルケーキ」、「ワリタラパ」で、正月の定番的な食べ物である。

キリバッドは別名「ミルクライス」と言い、このミルクは牛乳ではなく、ココナッツミルクのことで、このミルクで炊き上げたご飯のことである。オイルケーキ

は油で揚げた甘い菓子で、色が濃くてあまり食べたいとは思わない。ワリタラパは初めて味わったのでよく分からないが、これもかなり甘い菓子である。スリランカの菓子類は非常に甘く、とうてい1個でさえ食べ切れるものではない。彼らは甘いものが好きで、紅茶を飲むのにも砂糖をかなり入れ、そんなにたくさん入れて大丈夫かと思うほどである。しかも1日に何杯も飲むので、男女ともに肥満の人が多い。糖尿病を患っている人がかなりいるようだ。

友人宅で気がついたことが一つある。それは日本の正月の習慣と同じような「お年玉」をあげるということがある。私は家族の方々からかなりいただいてしまった。このような習慣があるのを知っていたら、お年玉の袋を用意しておくのだったが、本当に残念である。こちらでは紙袋等に入れて渡すのではなく、キンマという植物の葉に載せて渡すのである。このキンマはあらゆる行事の際に用いられていて、これまでもよく見かけたことがある。

ラタナヤカという名前の別の友人宅では、10人ほどの客が招かれ、共に正月を祝った。祝ったといっても、ただお酒やコーラを飲みながら長時間談笑した程度であるが、ラタナヤカのベルギーの友人2人もちょうどスリランカに来ていたので招かれていて、実は彼らとは10数年ぶりの再会となった。2人は私の事を覚えていなかったが、ラタナヤカを知り合うきっかけを作ったのが彼らなのである。たまたまあるホテルに滞在していた時、2人は私が日本人だと分かったと、彼らの友人であるラタナヤカを紹介し、ちょうど日本語を勉強していた彼と話す機会を得たのであった。

12時頃にラタナヤカの家に着き、それから延々と話したり、飲んだりして、結局昼ご飯を食べたのは4時を回っていた。ゆつくり味わう暇もなくなり、食事を終われば、あわてて帰ることとなり、4時半近くに解散となった。それからバス停まで送ってもらい2時間ほどかけて帰宅し、7時には何とか帰り着くことが出来た。

(続く)



①友人宅での正月料理



②正月にお馴染みの太鼓の演奏



③ラタナヤカの家で出された食事



④村での豚の解体作業。小さく切り分けられて売りに出される。



⑤ラタナヤカの家でのパーティの様子。ベルギー人2人も招かれていた。

スリランカで懐かしの味と言うとカレーが先ずは頭に浮かぶのですが、これは店によっても味は千差万別で、どこか1カ所の店の味が懐かしいと言うのは難しいです。同じように、友人宅で御馳走になったカレーも、それぞれの家庭の味があって全部の家のカレーが懐かしい味と言えます。昨年6月に紹介したミーキリ(水牛の乳から作るヨーグルト)や、カシューナッツなどのナッツ類をとんでもなく辛く味付けしたスナック菓子のデヴィルド・ナッツも懐かしい味です。今回はこれらのスリランカ由来の懐かしい味ではなく、コロンボにあるスリランカ料理レストラン以外から懐かしいレストランの味を探してみようと思います。

先ず、コロンボのレストラン事情を簡単に説明してみましょう。スリランカは長年に渡って続いたスリランカ政府とLTTE(タミル・イーラム解放のトラ)との抗争等もあって、隣国のインドとモルディブに比べると日本人にとっては観光地・リゾート地としてはポピュラーな国ではありませんでした。外務省から渡航注意喚起情報なんていうのが出ていたので仕方のないところですが、これは日本人にとってだけの事で、数か月に1度はコロンボ市内で自爆事件が起こり、多くの死傷者が出ていた1990年代でもヨーロッパから多くの長期バカンスを楽しむ客が来ていました。植民地時代からヨーロッパ人にとってスリランカは、一度は行ってみたいバカンス地の一つだったそうで、揉め事には我関せずのようです。

宗主国の英国からのバカンス客を除くと、ドイツからのバカンス客の数が最も多く各地にドイツ村と呼ばれるドイツ人ばかりが集まる特定のエリアがあります。ドイツ村以外にも特定の国の人が集まる場所が何カ所もあり、今は閉鎖されましたが、以前はヌーディストビーチまでありました。これらのバカンス客目当てに、コロンボ市内には英国、ドイツ、フランス、イタリア等のヨーロッパ料理の本格的レストランが数多くあります。変わったところではCheese Swissというスイス料理の店があります。ここでは一年中暑いスリランカで熱々のチーズフォンデュを食べる事が出来ます。此処は予約を取って行かな

いと、もともと席数が少ない事もあって満席の事があるほど流行っています。ゴルフフェースホテルの道路向かいにあるBavarianというドイツ料理の店は、スリランカに住んで居る日本人にはビアホールのような感覚で利用されていて、行けば必ず誰かしらに会えます。

日本食レストランも何軒かあるのですが、驚くほど多いのは中華料理と韓国料理の店。ホテル内の店は観光客相手ですが、圧倒的に多い一軒家レストランは観光客相手というよりは在住中国人・韓国人が相手です。衣料品等の製造工場や建設会社の経営幹部・技術者など両国の方々がご家族と一緒に大勢スリランカに住んでいます。その他インド・タイ・インドネシア等アジア各国のレストランも揃っています。

数あるレストランの料理の中で僕が一番懐かしく感じる味は、錦城レストラン(中華料理)のチリガーリックヌードルですね。この店はコロンボの中心から少し外れた場所にあるので、客層は中国人、近隣のスリランカ人、各国駐在員といったところです。料理の名前から判るように、単にチリとガーリックで炒めた焼きそばなのですが、なかなか強烈な料理です。この料理が懐かしいと言うか怖いのは、料理が運ばれて来て卓上に置かれて湯気が顔にかかっただけで、涙が出てくるところです。麺の色は真っ赤で口に入れるとチリの辛さと、ガーリックの刺激で鼻腔内が麻痺し、次に頭髪の間から汗が流れ出てきます。慣れるとこの辛さと刺激が堪らなく、ビールがより一層美味しく飲めます。この文章を書いているだけで、舌先に辛さがよみがえってきています。

日本から激辛好きの友人が来た折には、この焼きそばを食べさせて悲鳴を上げるのを見て楽しんでいました。驚いた事に、この友人は帰国する前夜の夕食にはチリガーリックヌードルを食べたいと言ってきました。なんでも、この焼きそばは彼がそれまで食べた激辛料理のトップ3に入ると言って再度挑戦したのですが、やはりまた泣いていました。この料理は必ず注文するのですが、最後のメに注文しないで、最初に注文してしまうと後の料理の味が全く分からなく

なるのが欠点です。20歳代最後の頃にマレーシアに駐在していた時にグリーンチリの酢漬けを丸ごと食べた時にも涙が出てきて、味覚が無くなったけれど、チリガーリックヌードルの方が更に強烈です。初めてスリランカに行かれる方には、スリランカ料理を是非とも食べて頂きたいのですが、リピーターの方で激辛料理がこよなく好きと言う方にはお勧めです。

レストランで売られているミールボックス(テークアウトのお弁当のような物)にも懐かしい味がいくつかあります。市内のゴール道路沿いや、これと並行して走るディプリケーション道路沿いにあるレストランの脇でよく売っています。紙かプラスチックで出来

た入れ物にご飯をよそってもらい、お皿に並べられた何種類かの料理から、好きなものを選んでご飯の周りに載せてもらうだけの物ですが、東南アジアによくある「ぶっかけ飯」のようで、これも懐かしい味の一つです。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついでに折に‘わりい’の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

サハ共和国・ヤクーツクだより ①

杉嶋俊夫

サハ共和国という国の名前をご存知でしょうか。私は15、6年前、たまたまサハ共和国から来た口琴演奏者たちによる演奏会に参加したことがありました。その演奏会でのサハ共和国についての説明で、サハ共和国はロシア連邦構成国としての極東の国で、口琴がサハの民族楽器として誰でも演奏できるように、なんと学校には口琴の時間が必修であるということなどを聞きました。今回、ネット検索をしてびっくりしました。インドとほぼ同程度の広さの、日本国の8.5倍の面積を有し(ロシアの89連邦構成主体中最大)、ダイヤモンド、石油、天然ガス、石炭等の資源を豊富に埋蔵した国なのだそうです。

昨秋、Emmeさんのボイストレーニング講座に参加された杉嶋俊夫さんが私たちと一緒に食事をしたことから、今年春から7月までの半年間、そのサハ共和国へ日本語講師として行かれることを知りました。どんな国か、人々はどんな生活を送っているのか、具体的に知りたいのでサハ共和国だよりを送って下さいとお願いしました。早速送って下さった第一報です。‘わりい’の皆様も是非一緒に楽しんで下さい。

(田井)



昨年末のテレビの特番や先月の新聞の連載で、東シベリアにある世界一寒い村オイミャコンのことを知ったかたはかなりいらっしゃるのではないかと思います。私は日本からその村へ行く時の経由地点にあたる、ヤクーツクという町に来ています。6月までここで日本語の講師をする予定です。

ヤクーツクはロシア・サハ共和国の首都で、人口約40万人の比較的小さな町です。オイミャコンには負けませんが、最も寒い1、2月にはマイナス40℃

以下まで気温が下がります。その時期は昼間は太陽が地平線から顔を出した状態で留まり、一種の霧が町中に立ち込めます。私は3月中旬に赴任したため残念ながら体験できませんでした。4月初旬現在の気温はマイナス10℃ぐらい、日照時間は日本と変わらず、あまり寒いとは感じません。

ロシアの都市に長期滞在するのはこれで4回目になりますが今までと大きく違う点があります。それはアジア系の人々が多いことです。ヤクーツクは口

シア人がつくった町ですが、のちにサハ人も移ってきて、共存しています。店の看板も、ロシア文字で書いてあってもよく見るとサハ語だったりします。

歴史的にみると、もともとバイカル湖周辺に住んでいたトルコ系の人々が北上して現在の地にたどりついたと言われています。そのため顔もモンゴルの人々によく似ています。私の職場には日本の某芸能人にそっくりな女性がいて、彼女の顔を見るたびにちょっと不思議な気分になります。

ここに来て強く感じるのは、伝統文化の生命力です。昨日、大学の授業で自分たちの国や文化を日本語で説明する練習をやらせたところ、伝統料理と装身具の話で盛り上がり止まらなくなりました。現地の音楽や舞踏芸術の豊かさも感じられます。ほかにも魅力的な要素はありますが、この続きはまた次回させていただきたいと思います。

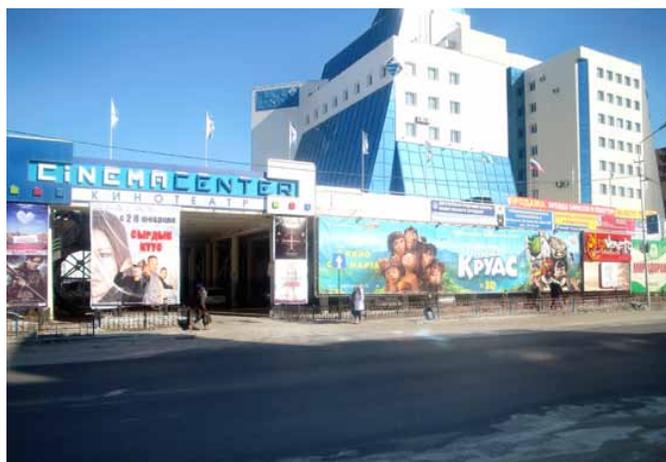
(2013年3月)



市の中心部の交差点(雪が解け始めた頃、4月上旬)。日曜だったので人が少ない。

杉嶋俊夫 略歴：

東京都町田市生まれ。千葉大学卒。大学で認知心理学を専攻、途中で言語学に転向、シベリア先住民の言語を学ぶ。院在籍時に西シベリア・トムスクの大学に留学したことがきっかけで、トムスク市やロシア西部・リャザン市にある大学で日本語を教える。今回の派遣も、リャザン大学の時と同じ日露青年交流センターの派遣プログラムによる。



市の中心部にある映画館。映画館は市内に4つあります。この写真の映画館は、サハ映画とアメリカ映画を上映していました。もちろんロシア映画も上映します。



サハの英雄叙事詩「オロンホ」の名前がつけられたショッピングセンター。都市で暮らす人々の心の中にも神話的世界が生きているのかなと感じる場面があります。



市内各所にあるパソコン店。ヤクーツクはいわば陸の孤島のような都市なのでインターネットは重要です。すでに、無線LANでインターネットに接続することができるWi-Fi(ワイファイ)がかなり普及しています。

失敗しないでシュークリームを作ろう会

講師：杉野一

2013年4月19日(金) 場所：まちだ中央公民館・調理室



シュークリーム作りは、シュー(キャベツ)の形が楽しいのとたっぷり詰まったクリームが魅力で、何回か作ったことがある。なかなかパリッとした皮にならず、冷めると無残な形に潰れ、それでも「手づくりは美味しいね」等と負け惜しみをいったりしていた。

講師の、杉野一氏は大阪でパン作りに関わって60年、特に中国語が堪能という訳ではないそうだが、退職後は一人で中国のあちこちに出かけては長期滞在して現地のホテルなどでパン作りの指導をボランティアでしているという奇特な方だ。小柄で磊落な人柄が現地の人に愛されて、新聞で紹介されたり誕生祝をして貰ったりしている。

そんな杉野氏が、23年度と24年度の町田市「つながりひろがる地域支援事業」に参加くださり、更に上記事業の関連事業として開催された「留学生たちと料理で交流」に参加された。「中国では皆さんに大変お世話になっている。自分ができることで

留学生の皆さんと関わりたい」とのことで、今回の催し開催となった。参加の留学生3名も初めての洋菓子作りに意欲満々で挑戦した。又、私たちも本格的なカスタードクリーム的美味しさに舌鼓を打ち感動した。

(報告：田井)

一般参加：15名 留学生参加：3名



▲手つきはレシピには書いてないから、杉野氏の手の動きから目が離せない。

◀シュークリームの皮種の粘り具合が成功の鍵だ。



初めての洋菓子作りを楽しむ留学生たち



さあ、ティタイムですよ～!



どれもこれもこんがり美味しく焼けた!

麻生市民館利用団体のお祭・あさおサークル祭2013

2013年6月1日(土)・6月2日(日)

場所：川崎市麻生市民館(小田急線新百合ヶ丘北口3分)

《'わんりい'のお宝京劇ビデオ上映/山下孝之さんのケーナ演奏》

'わんりい'の催しは、全て参加無料です。皆さん、是非ご参加を！！

【6月1日・土】

① 'わんりい' お宝・京劇ビデオ上映 I
視聴覚室 10:00～12:00

1990年代の初め、日本に未来を託して来日した若い京劇俳優たちが熱演。「白蛇伝」や「水滸伝」から仙女や英雄が甦る

② アンデスの民族楽器・ケーナの演奏
演奏者：山下孝之

大会議室 14:30～15:30

どこか懐かしく、どこか心なごむケーナの音色を生かした日本的味わいのある山下孝之創作曲多数！

【6月2日・日】

③ 'わんりい' お宝・京劇ビデオ「長坂坡」上映 II
視聴覚室 10:00～12:00

中国京劇界の人間国宝・王金璐が演ずる三国志の英雄・趙雲の美しくも迫力満点の立ち回りを見る



長坂坡カット

*ほかの団体の催しは、タウンニュースで
<http://www.townnews.co.jp/0205/2013/04/19/184563.html>

みんなで育てる多文化共生 あーすフェスタかながわ2013 入場無料

pdf チラシ→ http://www.earthplaza.jp/earthfesta/pdf2013/EFK2013_EventProgram.pdf

アースフェスタは、いろいろな国の屋台やステージなど盛りだくさんで、約2万人が訪れる大イベント！中国、コリア、ブラジル、フィリピン、カンボジア、ペルー、オーストラリアなどの外国人の仲間たちと一緒に多文化共生を考え、打ち合わせて祭りを盛り上げています。

5月11日(土)、12日(日) 10:00～17:00

場所：神奈川県地球市民かながわプラザ & 栄区民センター・リリス

横浜市栄区小菅ヶ谷 1-2-1 JR根岸線・本郷台駅(大船駅の次駅)出てすぐ

主催：アースフェスタかながわ2013実行委員会

問合せ：アースフェスタかながわ2013実行委員会共同事務局

神奈川県県民局国際課企画グループ ☎045-210-3748(土日休) 公益社団法人青年海外協力協会 ☎045-896-2916(月曜休)

◆わんりいの催し

中国語で読む・漢詩の会

よく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう！正しい発音で読めるように練習しよう！漢詩の時代的背景や詩に描かれている情景を知って漢詩を一層楽しもう！

▲場所：まちだ中央公民館8F・学習室7

▲月日：5月の講座5月19日(日)

6月の講座6月9日(日)

▲時間：10:00～11:30

▲講師：植田渥雄先生

(現桜美林大学孔子学院講師)

▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：20名(原則として)

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎050-1531-8622(わんりい)

E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp



◆わんりいの催し

ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう！

ボイストレーニングをして、日本人が長い間、親しんだ童謡や抒情歌などの愛唱歌を気持ちよく歌いましょう。

◆動きやすい服装でご参加ください

▲場所：まちだ中央公民館・6F視聴覚室

▲月日：5月21日(火)・6月18日(火)

▲時間：10:00～11:30(時間変更します)

▲5月の練習歌「浜辺の歌」

6月の練習歌「川の流れるように」

▲講師：Emme(歌手)

▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：15名(原則として)

●申込み：わんりい ☎042-734-5100

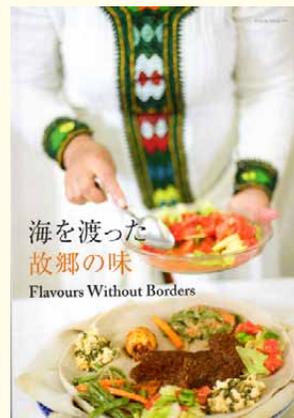
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp



【海を渡った故郷の味・試食会とお話し】

日本で生活する難民達が故郷を偲ぶ味はどんな味！
難民たちに教えて貰った料理を試食して、その国を知ろう！！

- 2013年6月8日(土)
- 13:00～15:00(開場12:30)
 - ▲ 13:00～14:00(試食会)
- 「海を渡った故郷の味」レシピ集から4、5種類の料理を試食します。
 - ▲ 14:00～15:00 難民の方とNPO難民支援協会によるお話し
- 町田市民フォーラム3F・調理室
- 500円 ● 定員:30名(先着30名 5月7日受付開始)
- ◆ 申込み:町田国際交流センター FAX:042-722-5330
住所、氏名、電話番号を記入し、件名を「故郷の味」として、
上記FAX番号、又はホームページ問い合わせ欄より送信してください。
- ◆ 主催:町田国際交流センター(担当:協力部会) 共催:町田市
 - 難民とは、宗教、国籍、人種や政治的な問題から自分の生命を守る為、やむを得ず、自分が生まれ育った国から「避難」しなければならなかった人たちのことです。そんな難民が日本にも多数います。



「海を渡った故郷の味」 レシピ集

今年2月、難民の皆さんが紹介下さった世界の料理・40種類を全頁カラーで掲載の美しいレシピ集(1,575円)がNPO・難民協会がまとめました。希望される方に当日頒布します。

第8回「弦之縁」

姜小青フレンドリーコンサート

中国の伝統曲のほか、姜小青のニューアルバム収録のオリジナル曲を中心に演奏

出演:姜小青(古箏)、西本梨江(ピアノ)
ゲスト:涂善祥(中国琵琶)

2013年6月14日(金)18:30開演

めぐろパーシモンホール・小ホール

(東京都目黒区八雲1-1-1)

- 参加費:4,000円(当日/4,500円) 全席自由
- 問合せ&申込: ☎080-1304-7347(村山)
FAX:045-313-5188
E-MAIL: xianzhiyuan_hz@ybb.ne.jp

主催:姜小青フレンドリーコンサート実行委員会

【映画】「雲南の三姉妹」^{ワンピン}王兵監督最新作 <http://moviola.jp/sanshimai/>

2012年ベネチア国際映画祭オリゾンティ部門グランプリ
2012年ナント三大陸映画祭グランプリ&観客賞ダブル受賞

中国国内で最貧困といわれる雲南地方の村で、3人だけで暮らす幼い姉妹の「生のエネルギー」を映し出した感動のドキュメンタリー

渋谷シアター・イメージフォーラム 5/25(土)～
☎03-5766-0114

- 「雲南の三姉妹」の上映を記念して^{ワンピン}王兵監督の過去の作品「鉄西区」/「鳳鳴-中国の記憶」を上映(5月11日～24日)
http://moviola.jp/sanshimai/tetsu_feng.pdf
- 「雲南の三姉妹」上映時間などの詳細は、上記イメージフォーラムにお問い合わせください。

◆ あさおサークル祭で上映の、「わんりい」お宝京劇ビデオ2本は共に「わんりい」が活動開始当初、現在も京劇俳優として活躍の張紹成氏と共に取り組んだ事業を、かつての小田急ケーブルビジョンが複数の大型カメラで撮影した本格的な映像です。まだ20代だった張紹成氏や殷秋瑞氏の若々しい舞台が見られますよ。皆さんのお出掛けを是非お待ちしております。

日中文化交流市民サークル「わんりい」

【4月の定例会と6月号のおたより発送日】

- ◆ 定例会:5月7日(火) 13:30～田井宅
- ◆ 6月号のおたより発行日:6月2日(日)13:30～
- ※ 6月号の発送準備は、麻生市民館・視聴覚室です。

「わんりい」183号の主な目次

- 北京雑感(74)公共交通機関(地下鉄)……………2
- 私の調べた諺・慣用句(19)「窮鼠猫を噛む」……………3
- 媛媛讲故事(53)「花好き翁Ⅲ」……………4
- 【智子の雑記帳】92「日本再発見 外国人と一緒に…」…5
- 中国-城市めぐり(24)「紹興市そのⅡ」……………6
- 中国の笑い話Ⅷ……………8
- 四姑娘山写真だより(30) 女王谷の清明……………9
- 日本探検記② 鄧仁有的中国講座……………10
- 台湾登山ツアー体験② 虎爺温泉会館……………12
- スリランカ・ケラニアだより②キリバットゴダの生活……………15
- スリランカ紹介(67)「スリランカ 懐かしの味」……………17
- サハ共和国・ヤクーツクだより①……………18
- 【活動報告】シュークリーム失敗しないで作ろう……………20
- 「わんりい」掲示板……………21・22